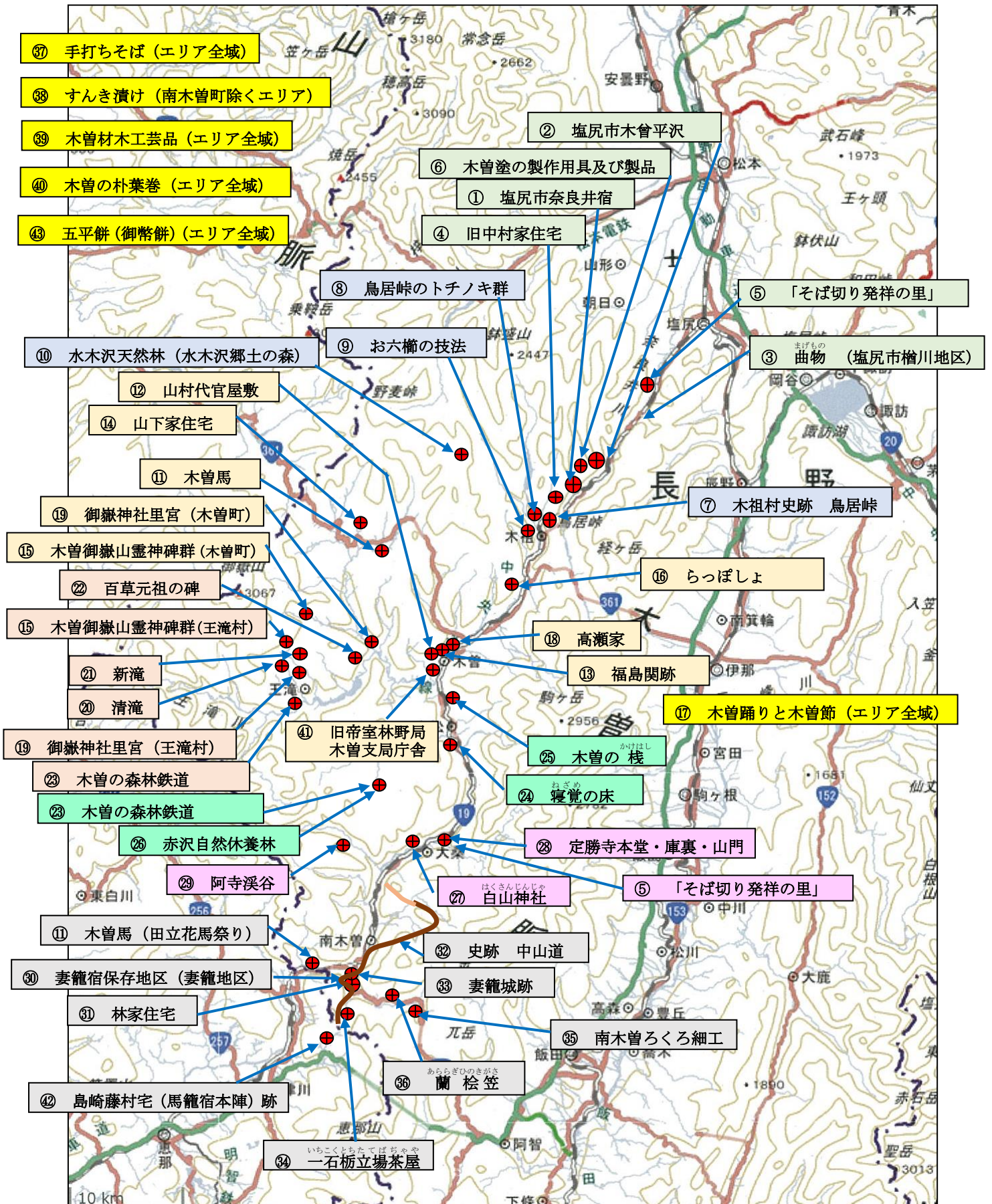


① 申請者	◎ 南木曽町 (南木曽町・大桑村・上松町・木曽町・木祖村・王滝村・塩尻市・中津川市)	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
木曽路はすべて山の中 ～ 山を守り 山に生きる ～			
④ ストーリーの概要(200字程度)			
<p>戦国時代が終わり新たな町づくりがすすめられると、城郭・社寺建築の木材需要の急増は全国的な森林乱伐をもたらした。森林資源が地域の経済を支えていた木曽谷も江戸時代初期に森林資源の枯渇という危機に陥る。所管する尾張藩は、禁伐を主体とする森林保護政策に乗り出し、木曽谷の人々は、新たな地場産業に暮らしの活路を見出した。</p>			
<p>そして、江戸時代後期、木曽漆器などの特産品は、折しも街道整備がすすみ増大した御嶽登拝の人々などによって、宿場から木曽路を辿り全国に広められた。</p>			
<p>江戸時代、全国に木曽の名を高めた木曽<small>きそひのき</small>檜<small>きそうま</small>や木曽馬<small>きそしつき</small>、木曽漆器など伝統工芸品は、今も木曽谷に息づく木曽の代名詞である。</p>			
		 <p style="text-align: center;">奈良井宿の町並み</p>  <p style="text-align: center;">木曽漆器</p>	
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	木曽広域連合地域振興課		
電 話	0264-23-1050	FAX	0264-23-1052
E-mail	<a href="mailto:chiikisinkou@union.kiso.lg.jp">chiikisinkou@union.kiso.lg.jp</a>		
住 所	長野県木曽郡日義 4898-37		



出典：国土地理院ホームページ (<http://map.gsi.go.jp/>) 地理院地図を加工して作成

詳しい位置は、各市町村観光HP等でご確認ください。（塩尻市、木祖村、木曾町、王滝村、上松町、大桑村、南木曾町、中津川市）

ストーリー

(1) 木曾地域と木年貢

長野県南西部、塩尻市から岐阜県中津川市にかけての木曾地域は、総面積 2,512k m<sup>2</sup>と小さな県に匹敵する広さを有する。遥かに仰ぐ御嶽山は「古」より魂の還る霊山として人々の信仰をあつめ、その裾野を流れる木曾川は檜の山林と奇岩の溪谷を映し、木曾川沿いに街道木曾路が続く。



妻籠城跡から見た妻籠宿(南木曾町)

木曾路を包む木曾谷の約 9 割は森林地帯である。豊臣秀吉の時代、木曾地域は、狭い耕地の作物だけでは領民を養えない地域として、領民は米年貢(米の年貢)の代わりに木年貢(木の年貢)が課され、領民には木年貢を納めることで米が支給された。木年貢は、米が経済の基礎であった江戸時代になっても踏襲され、森林資源が木曾地域の人々の暮らしを支えていた。

(2) 木材需要の増大による森林資源の枯渇と厳しい森林保護政策

「木曾のナー なかのりさん 木曾のおんたけ ナンチャラホイ」と歌われる木曾節の「なかのりさん」とは檜を筏に組んで川を下る筏師のことだという。木曾檜は、木曾谷の代名詞ともいえる産業である。木目が緻密で優良な木曾檜は、鎌倉時代に造られた木曾谷最古の神社である白山神社など、古来神社仏閣建築に重用され、約 330 年前から、伊勢神宮が 20 年に 1 度、お宮を新たに建て替える式年遷宮の際に用いる御神木としても使われ続けている。



白山神社(大桑村)

この名木に危機が訪れたのは、江戸時代初期のことであった。戦国時代が終わり、安土・桃山時代以降、新たな町づくりが進められると、城郭・社寺建築の木材需要が急増し、全国的な森林乱伐をもたらした。江戸幕府から良材の無尽蔵の宝庫と目された木曾谷は、江戸・駿府・名古屋の城と城下町などの建設のために膨大な用材が伐り出され、深刻な森林資源の枯渇に陥ったのである。

木曾谷を所管する尾張藩は、江戸時代初期から木曾檜などの伐木への制限に乗り出した。この制限は、江戸時代中期には木曾谷のほぼ全域に及び、「木一本首一つ 枝一本腕一つ」といわれたヒノキなど木曾五木を伐れば死罪という徹底した森林保護となり、木年貢も廃止された。この施策は、山林乱伐を防ぐ森林保護政策の先駆であったが、森林資源で暮らしを立てていた木曾の領民にとっては厳しい経済統制となった。

(3) 木曾領民の暮らしを支えた地場産業

森林保護政策により山での採集を制限された木曾領民には、木曾の風土に根ざした地場産品の生産が奨励された。



木曾馬と御嶽山(木曾町)

木曾代官 4 代目山村良豊は、奥州から良馬の南部馬を買い入れ、木曾地域の風土に合う山坂に強い木曾馬に改良して、農民に飼育させることを奨励した。また、禁伐を課す代わりに領民の既得権として藩から村に支給される御免白木(使用が許可された材木を割って半製品にした材料)を利用しての曲物、漆器、お六櫛などの工芸品や木材加工、養蚕、生糸業、さらに御嶽山修験者から地元の人々に伝授された山野の薬草の製薬技術による「百草」製造などを地場産業として積極的に奨励した。地場産品と整備の進んだ中山道の流通経済を活かして産業振興を図ったのである。



お六櫛(木祖村)

木曾馬は、性格がおとなしく小型であるため女性でも世話できる農耕馬であり、馬市で売り買いされるだけでなく、領民の農耕・運輸にも大いに役立ち、江戸時代後期には領内に数千頭の木曾馬が飼育されていた。また、陶器に比べ軽く壊れにくい木工品や漆を施し耐久性を高めた漆工品は、木曾路を辿り全国に広まった。

こうして発展した木曾谷の地場産業は、江戸時代中期以降、領民の暮らしを支えた。

#### (4) 賑わう宿場の形成と地場産品の流通

木曾路は、鎌倉・室町時代までには信濃と京都・伊勢などを結ぶ重要な通路として発展していたが、江戸時代には、五街道の一つ中山道の街道整備とともに木曾 11 宿といわれる宿場が発達した。寝覚の床、棧、鳥居峠から遙拝する御嶽山など木曾谷の情景は、訪れた多くの俳人や浮世絵師などを惹きつけ、詩歌や版画となって世に知られるようになった。

宿場は訪れる人々を迎えることによる経済的利益の他に、木曾馬や木工品など地場産品の需要をもたらす生産・販売・運輸の拠点として賑わい、木曾谷の経済を牽引した。

奈良井宿は、幕府関係の公用旅行者や参勤交代の大名通行のために人馬を常備し、輸送・通信などの業務を負う代わりに一般の通行に対する独占的な稼ぎが許され、多くの旅行者の宿泊・休息のための旅籠や茶屋などが設けられていた。江戸時代中期には、宿場の規模は南北約 1 km に及び「奈良井千軒」と謳われ、常時 2000 人以上が働いていた。これは、宿場に職人町も構えていたためであり、奈良井宿は、木曾谷住民に許された御免白木 6000 駄のうち 1500 駄（1 駄は馬 1 頭が運ぶ荷物の量、約 135 kg）もの材料が割り当てられ、檜物細工や塗物、塗櫛などを多く産し、近くの漆工町木曾平沢とともに地場産業の木工品や漆工品の名産地になった。

妻籠宿は室町時代、木曾義仲の子孫義昌が木曾谷の南の備えとして整備した山城妻籠城の麓に形成された。江戸時代中期、規模は南北約 250m 程と 11 宿中最小ではあるが、人口は 400 人を超えた。これは、31 軒もの旅籠と地場産業に従事する人口が多かったことによる。江戸時代初期には宿場近くで木地師と呼ばれる職人が「南木曾ろくろ細工」を生産するなど、木工品の産地であったが、江戸時代中期、森林保護政策が強化されると村の庄屋が尾張藩に請願して檜物細工の御免白木の許可を得て、網笠の地場産業をおこした。農家の女性たちの手作業による蘭 桧 笠は、旅行者や僧侶の移動、農作業、茶摘み、舟下り、漁業、林業、土木など広範囲の用途に晴雨にかかわらず着用されたため、木曾路を通じて全国に広まった。

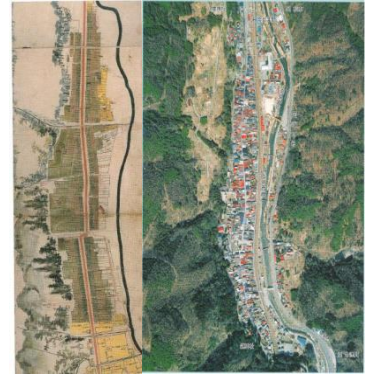
江戸時代中期、街道整備がすすみ庶民の御嶽登山が盛になると、全国から多くの御嶽山信仰の人々が訪れた。訪れた信者の数は、登山道沿いなどに建てられた霊神碑が数万基にのぼることからもその規模の大きさがわかる。御嶽山と木曾路を行き来する人々によって、木曾谷の流通はさらに促進された。室町時代以来、御嶽山麓の修験者が携帯したといわれる「そば」は御嶽山麓開田の特産となり、登拝のために訪れた人々などによって、木曾谷の地場産品や薬「百草」などとともに宿場から木曾路を辿り全国に広められた。

近代に入り、御嶽山麓の森林鉄道に木曾檜を満載した列車が走る。木曾谷の人々が守り続けた木曾檜は、再び木曾の代名詞として蘇った。そして、農家や職人町、宿場など木曾谷のあらゆる人々がそれぞれの生業を活かして発展させた地場産業は、全国に名高い在来馬や伝統工芸品などに結実した。

文豪島崎藤村の『夜明け前』は「木曾路はすべて山の中」で始まる。木曾谷の山と木曾路は、木曾谷の人々の「山を守り、山に生きる」暮らしを育んだ。その暮らしは、森林の保護、木曾路や宿場の保存、伝統工芸品の伝承を大切に思う心を培い、今も木曾谷に息づいている。



寝覚めの床（上松町）



奈良井宿・江戸時代絵図（左）と現在写真（右）（塩尻市）



妻籠宿の町並み（南木曾町）



蘭桧笠製作（南木曾町）



霊神碑（王滝村）

## ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ(※3)	文化財の所在地(※4)
①	しおじりしならい 塩尻市奈良井	国重伝建	中山道の難所の一つ、鳥居峠の北麓にあたる重要な宿場町であり、檜物細工や漆器、塗櫛等の手工業が盛んで、現在も町のつくりや家並みは当時の面影を色濃く残す。	塩尻市
②	しおじりしきそひらさわ 塩尻市木曾平沢	国重伝建	檜物細工や漆器の生産によって生計を立てる産業の町。店舗をはじめとして塗蔵等の作業場や職人の住まい等、漆器業にまつわる建物が建ち並ぶ。	塩尻市
③	まげもの 曲物	県知事指定 伝統工芸品	木曾桧を木理に沿ってへぎ、熱湯浸漬により曲げ加工を行い、そば道具や茶道道具等を作る。	塩尻市
④	きゅうなかむらけじゅうたく 旧中村家住宅	市有形	奈良井にある櫛問屋で、もと櫛職人であった中村利兵衛の住まい。お六櫛等を商った。	塩尻市
⑤	「そば切り発祥の里」	未指定	本山宿に碑、定勝寺に古文書がある。現在の蕎麦の形が木曾谷から始まったと考えられ、蕎麦が木曾の生活に根ざした特産品であることを示している。	塩尻市 大桑村
⑥	木曾塗の製作用具及び 製品	国有形民俗	木曾漆器館では、何世代にもわたって受け継がれ磨きぬかれた伝統技術の技を職人による実演で見ることができ、塗り箸の体験ができる。	塩尻市
⑦	きそむらしせき とりいとうげ 木祖村史跡 鳥居峠	村史跡名勝天 然記念物	松尾芭蕉が訪れ「ひばりより 上にやすろう峠かな」の句碑がある。御嶽遥拝所があり、霊神碑や神像が立ち並ぶ。	木祖村
⑧	とりいとうげ とちのきぐん 鳥居峠のトチノキ群	村史跡名勝天 然記念物	松尾芭蕉が訪れ「木曾の栃うき世の人の土産かな」の句碑がある。樹洞に入れた子が元気に育った言い伝えから、木の皮を煎じて飲めば子宝に恵まれるという言い伝えがある。	木祖村
⑨	ろくぐし きほう お六櫛の技法	県選択 無形文化財	お六櫛の名の起りは、頭痛もちのお六が、家の近くのミネバリの樹を櫛にして髪を梳いたことにより全快した伝説による。現在の主生産地が蕨原である。実演見学や体験もできる。	木祖村

⑩	みずきざわてんねりん 水木沢天然林 (水木沢郷土の森)	未指定 (現中部森林管 理局との保存協 定)	江戸時代、城や城下町を造るために木曾山の木が皆伐された後、僅かに残された木から自然に種が芽生え、現在の森が形成された。現在樹齢約550年の大さわらを始め、300年以上のヒノキやブナ、ミズナラ、トチノキなど針葉樹と広葉樹が混交する森林。	木祖村
⑪	きそうま 木曾馬	県天然記念物	北海道の道産子や宮崎県の御崎馬と並ぶ日本在来馬種で開田高原に「木曾馬の里」がある。南木曾町に伝わる五穀豊穰に感謝する「田立の花馬祭」では木曾馬が集落を練り歩く。	木曾町 南木曾町
⑫	やまむらだいかんやしき 山村代官屋敷	町建造物	江戸時代、木曾谷に地場産業を奨励した代官山村家の屋敷。山村家は、約280年間、木曾谷の代官を務めた。	木曾町
⑬	福島関跡	国史跡	中山道の要衝として「入鉄砲・出女」を厳しく取り締まった「福島関所」の跡。山と川に守られたその様相は「山河の固め」と詠われた。	木曾町
⑭	山下家住宅	県宝	木曾馬の大馬主として繁栄した山下家は、多い時で300頭余りを所有し、近隣の農家に貸し付けて馬産に力を注いだ。	木曾町
⑮	きそ おんたけさんれいじん ひ 木曾御嶽山霊神碑群	未指定	御嶽講の人々により死後魂が御嶽に還るよう願って建てられた石碑群	木曾町 王滝村
⑯	らっぽしよ	町指定無形	古くからお盆に行われている伝統行事。山吹山の山頂で火が焚かれ、松明を掲げた行列が木曾義仲の墓所へ参詣する。	木曾町
⑰	木曾踊りと木曾節	木曾町指定無形	木曾谷一帯で培われてきた代表的な踊りと民謡。ゆったりとした簡素な動作と、高旋律の節回しで歌う「木曾のナァなかのりさん」や「ナンチャラホイ」などの歌詞が特徴で、山深い土地に見いだされた各地の景勝地や名物のほか、伐り出された木材が川によって運ばれていく情景を彷彿とさせる。	塩尻市 木祖村 王滝村 木曾町 上松町 大桑村 南木曾町 中津川市
⑱	高瀬家	未指定	「木曾路はすべて山の中である」で有名な文豪島崎藤村の姉である園の嫁ぎ先で、高瀬家は、山村代官の家臣で代々関所番を務めた。	木曾町

⑱	おんたけじんじやきとみや 御嶽神社里宮	未指定	室町時代後期頃から信仰を集め、江戸時代には御嶽山頂に祀られた御嶽山座王大権現の里社として全国にその信仰が広まった。	王滝村 木曽町
⑳	きよたき 清滝	未指定	江戸時代、水行だけの軽精進でも御嶽登拝ができるようになり、庶民の信仰も集め、木曽谷を訪れる人を増加させた。	王滝村
㉑	しんたき 新滝	未指定	清滝と同じく、御嶽山修験者が修行する場所で、木曽谷を訪れる人を増加させた。滝裏に小さな岩祠があり、滝を裏側から見るできるので裏見滝とも呼ばれる。	王滝村
㉒	ひやくそうがんそ 百草元祖の碑	未指定	「百草」は、三岳黒沢口を開いた尾張の行者・覚明(かくめい)と、王滝口を開いた武蔵国の行者・普寛(ふかん)によって伝授されたといわれ、御嶽信仰の普及とともに、「御神薬」として行者たちによって全国の信者に配布されるようになったと伝えられる。	王滝村
㉓	しんりんてつどう 木曽の森林鉄道	未指定	小川、王滝森林鉄道を中心に木曽谷一帯に建設された。今も観光用に樹齢300年の天然林が茂る森林浴発祥の赤沢自然休養林の中を走り抜けている。	塩尻市 木祖村 王滝村 木曽町 上松町 大桑村 南木曽町
㉔	ねざめ 寝覚の床	国指定名勝	木曽八景のひとつ。木曽路を通る旅人が訪れ、数々の歌を詠んだ。松尾芭蕉も訪れ「ひる顔に ひる寝せふもの床の山」の句碑がある。奇岩の溪谷美の景観と浦島太郎伝説で知られる。	上松町
㉕	かけはし 木曽の 棧	県指定名勝	木曽八景のひとつ。松尾芭蕉が訪れ「かけはしや 命をからむ 鶯かつら」の句碑がある。	上松町
㉖	あかざわしぜんきゅうようりん 赤沢自然休養林	未指定	古来から檜などの良質な木材を産出し、伊勢神宮の式年遷宮の際にはここから選定された御神木が用いられる。森林が保護された森林浴発祥の地。	上松町
㉗	はくさん 白山神社	国重文	元弘4年(1334年)に建立され、白山神社、熊野神社、伊豆神社、蔵王神社の4社殿が鎮座し、現存する社殿建築としては信濃最古のもの。	大桑村

⑳	定勝寺本堂・庫裏・山門 <small>じょうしょうじ</small>	国重文	定勝寺で金永という人物が、そば切りを振舞ったという、日本で一番古い文献があり、木曾谷が蕎麦の特産地であることを示している。	大桑村
㉑	阿寺溪谷 <small>あてらけいこく</small>	未指定	ヒノキ・サワラ・ネズコ・アスナロ・コウヤマキの木曾五木に囲まれた溪谷で、美しい木曾檜の林がある。	大桑村
㉒	妻籠宿保存地区 <small>つまごじゅく</small>	国重伝建	江戸から 42 番目の宿場として慶長 6 年 (1601) に制定され、江戸期を通じて宿駅としての機能を果たしてきた。宿场景観地区は、江戸期の趣を今も色濃く残した宿場町。	南木曾町
㉓	林家住宅 <small>はやしけ</small>	国重文	妻籠宿で、代々、脇本陣・問屋を勤めてきた。将軍家茂の御簾中として御降嫁した皇女和宮が、中山道ご通行の折本陣で御小休したが、その際拝領した車付長持をここで見る事ができる。	南木曾町
㉔	中山道 <small>なかせんどう</small>	国史跡	中山道は、慶長 7 年 (1602) に徳川家康により五街道の一つとして、江戸から京都までの重要な街道として整備された。馬籠峠から根の上峠までの総延長 19.6km のうち、中山道の旧態が良く残っている 8.5km が史跡。	南木曾町
㉕	妻籠城跡 <small>つまごじょう</small>	県史跡	戦国時代に整備された城跡。慶長 5 年 (1600 年) の関ヶ原の戦いの時も妻籠城に軍勢が入っている。帯曲輪や空堀などは原型をよくとどめている。	南木曾町
㉖	一石枒立場茶屋 <small>いちこくとうちたてばちや</small>	未指定	中山道沿いにある一石枒は、古くから旅人が疲れをいやす休憩地として栄えたところ。現存する建物で無料休憩所として旅する人を温かくもてなす。	南木曾町
㉗	南木曾ろくろ細工 <small>なぎそ</small>	国指定 伝統的工芸品	厚い板や丸太をろくろで回転させながらカンナで挽いて形を削り出す伝統技術。「木地師の里」で実演を見ることができる。	南木曾町
㉘	蘭 桧 笠 <small>あたらぎひのきがさ</small>	県指定 伝統的工芸品	寛文 2 年 (1662) に飛騨の落辺から来た人によって技法が伝えられた、(桧を薄く削って細長い短冊状にした) 「ひで」で編まれた手作りの笠。「笠の家」で実演をみることができる。	南木曾町
㉙	手打ちそば	県選択 無形民俗文化財	御嶽山修験者に所縁のある「そば」は開田高原特産となった。木曾谷は「そば切り」の草分けの地といわれる。	塩尻市 木祖村 王滝村 木曾町 上松町

				大桑村 南木曾町 中津川市
③⑧	すんき漬け	県選択 無形民俗文化財	御嶽山麓が海から遠く、塩の調達が難しいため、木曾町などでかぶを漬けて発酵させ、塩を使わず酸味を旨味として食べる食文化が生まれた。芭蕉一門も食し、「木曾の酢茎に春も暮れつつ」と門人が詠んだ。そばと合わせて食べる「すんきそば」や「とうじそば」は、木曾谷の冬の風物詩になっている。	木曾町 王滝村 木祖村 上松町 大桑村 塩尻市
③⑨	木曾材木工芸品	県指定 伝統的工芸品	木曾五木(ヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ)を素材として作られる木工芸品。江戸時代から作られていた桶樽類、箱物類をはじめ伝統建具やまな板、箸などの日用品まで木製の工芸品が今に伝わる。	塩尻市 木祖村 王滝村 木曾町 上松町 大桑村 南木曾町
④⑩	木曾の朴葉巻	県無形民俗	木曾地域の名物の一つ。米の粉を練ったものに、餡をつめて朴の葉で包んで蒸す。朴の葉が柔らかい5月～6月の餅菓子。	
④⑪	旧帝室林野局 木曾支局庁舎	町建造物	尾張藩の管轄であった木曾美林は明治政府に引き継がれ、明治22年以後、皇室財産「御料林」へと編入された。同39年に開庁した宮内省御料局木曾支庁は木曾ヒノキを基軸に森林鉄道等による近代的経営を行った拠点である。局は大正時代に「帝室林野局木曾支局」と改称され、昭和2年の大火により焼失したが、わずか半年で再建され、木曾山の歴史と皇室の威光を今に伝えている。	木曾町
④⑫	島崎藤村宅 (馬籠宿本陣)跡	岐阜県史跡	馬籠宿の本陣で、「木曾路はすべて山の中である」で有名な『夜明け前』の作者である島崎藤村の生誕地。隠居所は馬籠宿に残る江戸期の建造物。	岐阜県 中津川市
④⑬	五平餅(御幣餅)	県無形民俗	木曾地域の名物の一つ。粒が残る程度に半搗きにしたうるち米を串に刺しタレをつけて焼いたもの。形は様々で「わらじ型」「小判型」「団子状」などがある。山の神への供物として捧げられたと言われ、「御幣餅」と表記されることもある。 江戸時代中期からあったとされ、木曾地域では桧の串を使っていたといわれる。木曾谷の地場産業の発展とともに領民のハレの日の食事として食べら	塩尻市 木祖村 王滝村 木曾町 上松町 大桑村 南木曾町 中津川市

			れてきた。	
--	--	--	-------	--

## 構成文化財の写真一覧

① しおじりしならい  
塩尻市奈良井



② しおじりしきそひらきわ  
塩尻市木曾平沢



③ まげもの  
曲物



④ きゅうなかなむらけじゅうたく  
旧中村家住宅



⑤ 「蕎麦切り発祥の地」碑



⑥ 木曾塗の製作用具及び製品



(木曾漆器)

⑦ 木祖村史跡 とりいとうげ 鳥居峠



(峠から御嶽山を望む)

⑨ お六櫛の技法



⑧ とりいとうげ 鳥居峠のトチノキ群



⑩ みすきさわてんねんりん 水木沢天然林 (水木沢郷土の森)



⑪ 木曾馬



(木曾町開田高原 木曾馬の里)



(南木曾町 田立花馬祭り)

⑬ 福島関跡



⑫ やまわらだいこんやしき  
山村代官屋敷



⑭ 山下家住宅



⑮ きそ おんたけさんれいじん ひ 木曾御嶽山霊神碑群



(木曾町)



(王滝村)

⑯ らっぽしよ



⑰ 木曾踊りと木曾節



⑱ 高瀬家



⑲ おんたけじんじやきとみや 御嶽神社里宮



(王滝村)



(木曾町)

⑳ きよたき 清滝



㉓ おうたきしんりんてつどう 王滝森林鉄道



(王滝村松原スポーツ公園内)

㉑ しんたき 新滝



(赤沢自然休養林内)

㉒ ひやくそうがんそ 百草元祖の碑



②④ ねざめ 寝覚の床



②⑦ はくさんじんじや 白山神社



②⑧ じやうしやうじ 定勝寺



②⑤ かけはし 木曾の棧



②⑨ 阿寺溪谷



②⑥ あかざわしぜんきやうりん 赤沢自然休養林



③① つまごしゅく  
妻籠宿 保存地区



③③ つまごじょうあと  
妻籠城跡



③② 林家住宅



③④ 史跡 中山道



③④ いちこくよちたてばちや  
一石枳立場茶屋



③⑤ 南木曾ろくろ細工



③⑥ 蘭 桧 笠



③⑦ 手打ちそば



(とうじそば)

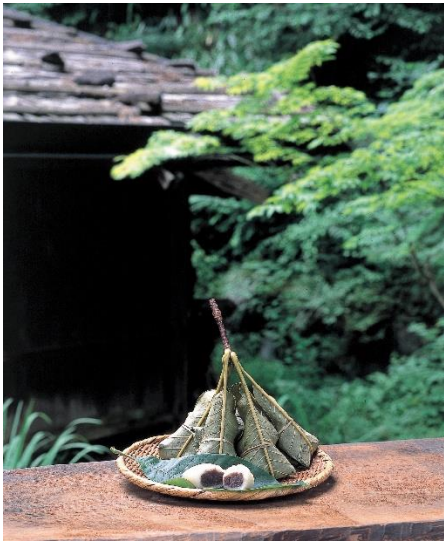
③⑧ すんき漬け



③⑨ 木曾材木工芸品



④⑩木曾の朴葉巻



④⑨五平餅 (御幣餅)



④⑪旧帝室林野局木曾支局庁舎



④⑫島崎藤村宅 (馬籠宿本陣) 跡



## 日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
28	木曾路はすべて山の中～山を守り山に生きる～

## (1) 将来像 (ビジョン)

## ○「山を守り 山に生きる」

～リニア時代に木の文化を伝える「木曾路ロングトレイル」の実現～

## 【目指す姿1】＜来訪者視点＞

・日本遺産の取組の成果によって木曾地域は、地域の自然、伝統を尊重する、自らが体験したことのないことに挑戦する、といった自己変革を求める旅行者が日本で最も訪れたい旅行先の一つとして世界的に認識されている。

・木曾地域には、江戸時代の面影を残す「サムライロード」として知られる中山道の街道と宿場を軸に、御嶽信仰を支えた御嶽古道等や、木曾の森林鉄道の軌道跡等も含め、一体として「木曾路ロングトレイル」が形成・運営され、「木曾路はすべて山の中」というストーリーに包含される旅の舞台となっている。更なる取り組みにより案内所やトイレ、道標など安心して歩ける環境が整い、利便性の高い公共交通やサイクリングなど多様なモビリティを組み合わせる周遊できる地域を目指す。

・来訪者は、多言語対応のガイドや情報機器などを活用し、様々なプログラムの体験や住民との交流を通して、日本文化の核心とも言える木の文化や、街道や山岳信仰の文化に接し、「山を守り 山に生きる」木曾の「癒し」を体感し、その感動を生きる力とすることを可能としていく。

・個々のライフスタイルやニーズに合った旅の宿や食を選択でき、木曾地域内で満足度の高い滞在ができ、繰り返し木曾を訪問し、第2のふるさととなるよう取り組みを進める。

## 【目指す姿2】＜地域住民視点＞

・住民にとって木曾地域は、心のふるさとであり、自分が自分らしくいられる自己実現の場となっている。子どもたちも含め、「山を守り 山に生きる」という先人の歩みに自らを重ね、木曾人としての一体感と誇りを持つことができる。また、来訪者との交流、コミュニケーションにより、異文化や多様な価値観に理解を深め、元気をもらい自己を研鑽することができる地域としていく。

## 【目指す姿3】＜民間事業者視点＞

・地域では民間が主役となり、訪れやすい受入環境やアクセスの整備、魅力的な体験プログラムづくり、情報発信力の向上等が推進されている。来訪者数の増加と滞在の長期化で観光消費額が増え、地域経済の収入となり、税収が確保され、再投資により文化財の保護や保存がなされ、人材育成や教育等の社会基盤が確保されたほか、さらなる受入環境の整備やDXを活用した競争力の強化など、魅力的で持続可能な観光地域づくりの好循環が生まれている。

伝統的工芸品をはじめ、地場産業の後継者ができ、事業が継続・発展し、新たな産業の可能性が生まれ、創業や移住につながっている。

地域の魅力を発信すると共に公共交通の利便性を向上させて、リニア中央新幹線の開業時には、岐阜県駅、長野県駅からアクセスが容易で、昇龍道のルートの一部として長野県内や北信越地方へのゲートウェイとなってさらなる誘客に努め、将来にわたり持続可能な地域を目指す。

【地域の長期構想における日本遺産の位置づけ】

・日本遺産の活用については、引き続き、長野県総合5か年計画木曾地域編、木曾広域連合広域計画をはじめ構成市町村の総合計画、観光振興計画等において「日本遺産＝地域づくり」と明確に位置づけ、県と市町村の広域連携重点事業として予算措置を含めて推進していく。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-A：馬籠峠を越えるハイカー数（日本人）

年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	14,915人	18,068人	17,156人			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	17,300人	17,400人	17,700人	17,900人	18,000人	18,100人

指標・目標値の設定の考え方及び把握方法  
 (公財)妻籠を愛する会 馬籠峠を歩くハイカー調査(馬籠峠一石柵立場茶屋における対面調査)  
 年1.0%の増加を目指す

指標①-B：馬籠峠を越えるハイカー数（外国人）

年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	7,639人	41,114人	53,494人			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	60,400人	63,400人	66,500人	69,800人	73,300人	77,000人

指標・目標値の設定の考え方及び把握方法  
 (公財)妻籠を愛する会 馬籠峠を歩くハイカー調査(馬籠峠一石柵立場茶屋における対面調査)

	2025 は、7 月までの実績を踏まえ 13%増。以降 5%増で 10 年後に 2 倍程度となることを目指す
--	--

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－A：日本遺産の住民認知度						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	50%	48%	60%			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	65%	70%	75%	80%	85%	90%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	2024 年度の中学生への認知度調査を基準とし、毎年度 5%の増加を目指す。2025 年度以降は木曾地域内でのイベント参加者にも同様の内容を調査し、広い年代で認知度向上を狙う。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：木曾地域における宿泊延数						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	479,000 人	529,800 人	517,600 人			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	527,800 人	540,400 人	561,900 人	583,100 人	600,000 人	622,600 人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	長野県観光地利用者統計（木曾郡）入込客数と平均泊数の増加による。					
指標③－B：木曾地域における平均泊数の増加						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	1.06 泊	1.06 泊	1.07 泊			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	1.08 泊	1.09 泊	1.10 泊	1.12 泊	1.13 泊	1.15 泊
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	長野県観光地利用者統計（木曾郡）による。平均宿泊日数 1.15 泊を目指す					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：公開活用ができている構成文化財の割合						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	95%	95%	95%			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	95%	97%	97%	100%	100%	100%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		協議会内での定期報告による全構成文化財の状況把握				

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：木曾地域への観光客入込数						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	290万人	330万人	359万人 (一部概算)			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	366万人	375万人	390万人	405万人	417万人	432万人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		長野県観光地利用者統計（木曾郡、塩尻市奈良井宿、平沢）及び岐阜県観光入込客統計調査（馬籠宿）によるエリア全体の数字。入込客数と平均泊数の増加による。				

(3) 地域活性化のための取組の概要	
<p>&lt;地域の概況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・木曾地域は、古くから日本の主要な城郭、寺社建築に重用された木曾檜の産地として、尾張藩の森林政策の下、木や森林との密接な関わりの中で木を活かし、山とともに生きる文化を育んできた。</li> <li>・また、中山道木曾十一宿が南北に連なり、江戸時代から木曾街道とも呼ばれる風光明媚な景勝地として知られ、様々な旅人をもてなしながら街道文化を培ってきた。</li> <li>・修験道を起源とする御嶽信仰では、全国から多くの参拝者が山頂を目指して御嶽古道を歩き、今なお御嶽信仰において重要な御座や滝行などの伝統が続けられており、木曾地域にも「お山」を仰ぐ山岳信仰が深く根付いている。</li> <li>・観光地としての入込は、街道の宿場町のほか御嶽信仰やスキーを中心とした需要が大きかったが、平成前期をピークに減少傾向となり、平成26年の御嶽山噴火災害やコロナ禍では大きく落ち込んだ。</li> </ul>	

・平成 28 年に日本遺産に認定され、木曾地域一体となった観光地域づくりに取り組んでいる。近年はインバウンド中心に持ち直し、観光地利用者数はコロナ前を上回る 238 万人まで回復した。

・木曾地域のインバウンドの特徴として、欧米からの旅行者の割合が高いことが挙げられる。この背景としては、香港拠点の旅行会社「ウォークジャパン」が、1990 年代から一貫して木曾路を歩くツアーを実施しており、欧米の主要マスメディアで多く紹介されたことで「NAKASENDO」が世界的なブランドとして認知されてきたことなどがある。

#### <これまでの成果・課題>

- ・ H26. 9 月 御嶽山噴火災害
- ・ H28. 3 月 日本遺産認定「木曾路はすべて山の中 ～山を守り 山に生きる～」
- ・ H31. 2 月 「木曾観光地域づくり戦略 2019」策定
- ・ R 4. 10 月 GAP 調査
- ・ R 6. 3 月 地域・日本の新たなレガシー形成事業「戦略プラン」策定
- ・ R 6～7 年 木曾路歩行ルート調査（中山道及び周辺の古道の実踏調査）
- ・ R 7. 位置情報データによる移動分析調査（長野県／木曾広域連合）
  - 〃 木曾地域における宿泊実態調査（北陸信越運輸局観光地域動向調査事業）
  - 〃 日本遺産を活かした広域周遊実証事業
- ・ R 8 御嶽山国定公園化（予定）
- ・ R 8. 5 月 中山道木曾路ウルトラオリエンテーリング（予定）
- ・ R 9. 信州デスティネーションキャンペーン（予定）

#### 【日本遺産の取組の成果】

##### ○ 外国人旅行者の増加

木曾地域の外国人延宿泊者数（長野県調べ）は、東日本大震災後、徐々に増加し、令和元年のピークでは3万人を上回り、コロナ後の回復も堅調である。

馬籠峠の一石栃立場茶屋においては、平成 21 年から地域団体がハイカーへの湯茶接待とともにアンケートを通年で行っており、リアルな来訪者の属性把握ができています。

外国人旅行者を想定したゲストハウスが増加したり、プロガイドツアーやハイカー向けの荷物運搬などのサービスが展開され始めている。また妻籠～馬籠など特定のエリアでは、時間帯によってはバスに乗り切れなかったり駅舎が外国人でいっぱいになり地域住民に影響を及ぼすオーバーツーリズム的な現象も出ている。

##### ○ 木曾地域が一体となった観光地域づくりの推進

木曾地域は、平成の大合併を経て木曾郡 6 町村の行政区域となっているが、観光については、合併前の「木曾十一宿」と呼ばれるエリアが一体感を有しており、塩尻市（奈良井宿）と岐阜県中津川市（馬籠宿）を含め連携して取り組んでいる。過去に大火で宿場の大半が焼失してしまった地域にとっても、日本遺産の面的なストーリーにより、歴史的裏付けをもって町並みの再生に拍車をかけることができた。

木曾を訪れる観光客に行政の境界線はない、との認識の下、エリアが一体となって取り組む機運を高め、中山道を中心に「歩く」ための実踏調査や、マーケティング戦略の

基礎となるデータ収集を進めてきた。

令和8年度からは、木曾広域連合に長野県が構成団体として参画予定であり、広域観光、公共交通等の分野でさらなる連携強化を図ることとしている。

#### 【課題】

- ・「木曾観光地域づくり戦略 2019」や「レガシー戦略プラン」では、エリア全体をコーディネートする組織（DMO）の必要性や宿泊施設の不足等、課題を示したが、実施体制が未整備で、コロナ禍も重なり一部の事業が停滞した。
- ・令和6年度から立て直しを図り、令和7年度は日本遺産を活かして木曾地域内の周遊に資するため民間中心のプロジェクトチームを結成し、これらの戦略を検証するとともに、必要な事業の速やかな実行に向けたアクションプラン、ロードマップの策定を進めている。
- ・コロナ禍の教訓として一部旅行者層に偏った取り組みは外的要因リスクに弱いことも想定し誘客に取り組む必要がある。特に日本人旅行者の団体客層は回復が見込めないことから、個人旅行・小旅行・目的旅行などを中心とした新たな需要を創出していくことが必要である。
- ・外国人旅行者については、今後も積極的に受入整備を進め、各種データを検証し、木曾地域全体での分散滞在に資する取り組みが必要である。

#### <地域活性化のための取組の柱>

##### 柱1 受入体制の強化

#### (1) 木曾路ロングトレイル【SAMURAI ROAD】の拡大

- ①「妻籠宿～馬籠宿」、「藪原宿～奈良井宿」といったインバウンドの人気スポットを拠点に、管内の構成文化財や観光地につながる面的な観光地としていく。  
現在の中山道を含めた木曾を縦貫するウォーキングコースを軸に、日本の町並みや木曾の森林風景を楽しみながら安心して歩ける道を「木曾路ロングトレイル」【SAMURAI ROAD】として整備する。
- ②南北に縦貫するロード上にある宿場を拠点として、東西方向への新たな動きとして赤沢美林や御嶽山、阿寺溪谷、開田高原、木曾駒高原などへの誘客に結び付ける。
- ③ウォーキング需要に応えるため、荷物配送等おもてなしサービスの充実を図る。
- ④自然と共生してきた文化財・祭りや森林環境の状況を発信し、持続可能な観光地であることを訴えながら誘客に活かしていく。木曾郡内町村と中津川市や塩尻市らでつくる中津川・塩尻・木曾・下伊那広域連携SDGs推進協議会との連携や各自治体における計画策定による意義付けを明確にする。

#### (2) 多彩な体験プログラムが生む滞在の長期化・宿泊

- ①日本遺産木曾路のストーリーの全体を体感できる日本遺産インフォメーション機能を整備する。木曾地域全体を通して案内し、インバウンドも含めて日本遺産のストーリーを伝えられる日本遺産木曾路ガイドを養成、コーディネートする。特にインバウンドに対してはガイド需要を深掘りし、専門性の高いプロガイドの活動を促進する。
- ②森林や星空、火山、溪谷など、ここにしかない自然環境を日本遺産木曾路のサブスト

ーリーとして活用し、地形学、天文学、エコロジー、精神文化等の多様な切り口で体験できるエコ（ジオ）ツーリズムを推進し、山を起点とした学びや体験で日本人の新たな旅行者層の誘客を図る。

③森林サービス産業の関係者と連携し、木工クラフトや、伝統的工芸品を身近に感じられる体験を促進する。

④日本遺産構成文化財である「すんき」、「五平餅」、「朴葉巻」など郷土食を活用した調理体験や「木曾馬」、「木曾の森林鉄道」など、木曾固有の資源を活用した体験プログラムづくりを促進する。

⑤上記①～④の推進にあたっては、マーケティングの視点からターゲット顧客層を絞るなど戦略的な事業展開を行う。

### **（3）【きそバス】などハイカーの補完となる交通アクセスの整備**

①100 km近い木曾路を歩いて満喫するには、ハイカーのニーズに合わせた交通アクセスの整備が必要となる。「木曾路ロングトレイル」の経路に沿っている国道19号を往復し、乗り換えて周辺地にアクセスができる広域幹線バス「きそバス」を運行することで歩くルートを選択肢を拡大し観光振興につなげる。

②長野・岐阜県境をまたぐバス路線の新設や乗り入れ・周遊券などにより、外国人旅行者の分散を行いながらオーバーツーリズムの解消にも取り組む。また、中津川市に予定されているリニア新幹線岐阜県駅を拠点として塩尻市から北へ（松本市）、開田高原から西へ（高山市）向かう交流人口の流れに対応できるよう交通体系を整備していく。

## **柱2 情報発信の強化**

①現状は、パンフレット等紙媒体の情報発信が主体となっており、SNSによる情報発信も効果的な活用ができていないため、データをもとにターゲットを設定し、マーケティング戦略の下で木曾管内全体を見据えたプロモーションを進めていく。

②外国人旅行者向けに的確な情報発信を積極的に図るべく、来訪者データの分析を通じた媒体選定、発信を行う。

③映画やドラマのロケ地として、実在の場所を訪れる聖地巡礼の効果は多方面にわたるが、木曾地域は多様な候補地があるにも拘らずロケ受入実績が少なく、受入ノウハウが不足している。今後、ロケ誘致に積極的に取り組む基盤をつくるため、フィルムコミッションを設置していく。

④郷土食の国文化財への登録を推進し、郷土食や地酒、地域特産の菓子など食文化を発信していく。

⑤歴史的つながりの深い中京圏等の他の日本遺産とも連携したPRを行う。

## **柱3 組織・財源の見直し**

①事業の効果的な執行体制を強化するために「木曾地域文化遺産活性化協議会」内に執行責任を負う「地域コーディネーターチーム（仮称）」を置き、木曾観光連盟業務の見直しを行いつつ事務局を「日本遺産木曾路推進室（仮称）」として日本遺産を軸に事業執行していく。「地域コーディネーターチーム」は日本遺産活用の旗振り役として迅速かつ俯瞰的な執行管理を行う。

②各種事業を展開する安定的な財源として、長野県が徴収する宿泊税の一部を日本遺産事業に運用していく。また長野県が日本遺産をはじめとする観光諸施策に地域と共に関わっていく観点から、長野県が木曽広域連合の構成団体として参画し県との連携の強化を図る。

③事務局体制については、新たなDMOガイドラインの要件を満たす体制を想定し、官民連携で機能強化を図るとともにマーケティングに専門性を有する人材を活用するなど、将来的に法人化等、民間主体の運営へ移行する。

#### 【地域活性化のための取組のポイント】

##### ○日本遺産を枠組みとした観光振興

昭和40年前後のいわゆる木曽路ブームによる観光の盛り上がりから平成の大合併、御嶽山噴火災害、コロナによる影響と浮き沈みを経てきたが、日本遺産認定を機に日本遺産が木曽路全域の観光振興の柱となり、地域が再びひとつになって取り組む「御旗(みはた)」(指針)となるよう取り組んでいく。

##### ○地域住民が主体となる日本遺産の活用

- ・ロゴマークの活用を図るためにワッペンやバナーなどを配布し、目立つ場所に掲示。
- ・日本遺産の日に加えて季節ごとに施設を無料開放するなどして理解を深める。
- ・構成市町村単位の広報誌や集会などで折に触れて周知する。

##### ○官民連携による取組

- ・民間事業者が執行機関として参画し、事業推進体制の強化を図るとともに、外部民間事業者や資金の活用などネットワーク強化による基盤強化を図る。
- ・「広域リージョン連携」やローカル10,000プロジェクトなど、国の制度の活用を図る。

#### (4) 実施体制

##### ○ 実施主体： 木曽地域文化遺産活性化協議会

(会長:南木曽町長)

(事務局:木曽広域連合「日本遺産木曽路推進室(仮称)」)

(構成団体:日本遺産構成市町村、木曽広域連合、木曽観光連盟、長野県県民文化部文化振興課、長野県木曽地域振興局、長野県木曽建設事務所、長野県商工会連合会木曽支部(郡内5商工会を含む)、塩尻商工会議所、木曽郡文化財保護連絡協議会、文化財等保存関連住民団体等)

◎ 総会... 役員・事業計画・予算の審議決定(各種団体の長)

◎ 地域コーディネーターチーム... 事業の執行管理(マーケティング力、顧客志向(民間セクター)、地域外・若い方の視点で選任)

◎ 委員会... 戦略企画・事業計画の承認

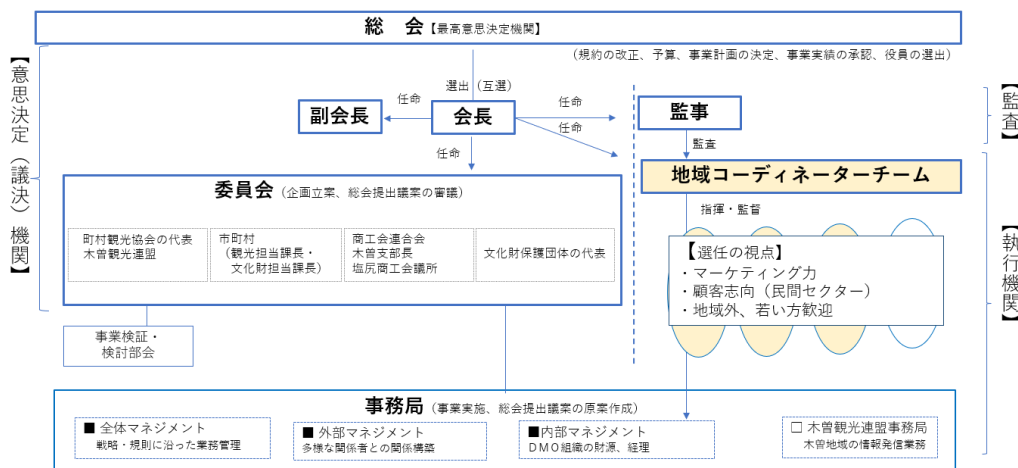
(行政担当課長、文化財等保存関連団体、民間事業者、町村観光協会、商工会等)

◎ 部会

- 日本遺産木曽路事業検証・検討部会... 日本遺産事業登録・変更に係る検証・検討(行政文化財担当課長、保存関連住民団体代表等)

\* 認定エリアが木曾観光連盟の所管エリアと同一であり、協議会事業の観光分野と木曾観光連盟事業を見直す中で日本遺産推進策として新たに日本遺産木曾路推進室（仮称）に位置付けると共に、専従的にコーディネートしていく。

木曾地域文化遺産活性化協議会 組織体制(案)



上記体制を基軸に、中津川・塩尻・木曾・下伊那広域連携 SDGs 推進協議会とも連携しながら、リニア時代を見据えた持続可能なスローツーリズムの中にも日本遺産を展開していく。

【人材育成・確保の方針】

- ・ 地域コーディネーター、ガイドの養成に取り組む
- ・ 地域コーディネーター、マーケティング人材は、地域活性化企業人制度や副業を活用した採用も検討
- ・ 特定地域づくり事業協同組合などの制度の活用も検討

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

○組織の再編

- ・ 協議会が木曾観光連盟の所管エリアと重なっているため、両団体の組織再編と事業精査による集約化効率化を図り、日本遺産を軸とした事業に統一化していく。
- ・ 委員会などを通じて、管内観光協会や民間事業者の意見を吸い上げながら、戦略的に各種取り組みや事業を実行に移していく。
- ・ 組織や事業進捗などを適時マネジメントしていくために地域コーディネーターチームを設置する。

○財源の確保

- ・ 安定的な財源として、長野県が徴収する宿泊税の一部が市町村に還元される交付金の一部を拠出し日本遺産事業に運用していく。
- ・ 日本遺産木曾路のロゴマークの商用利用やガイド手配の手数料、協賛金、広告収入、クラウドファンディング、受託事業等、様々な手段により協議会の独自財源の確保に取

り組む。

○事務局の強化

- ・長野県が木曽広域連合の構成団体となって職員を派遣するとともに、新たな視点を加えながら取り組みを行っていく。

○上記組織再編を行う中で、広域的なマネジメントに適したDMOや法人化について研究検証し自主運営できる組織をめざしていく。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

・構成文化財については、日本遺産としての活用度を高めるために国等の補助事業も活用しながら文化財の保存・活用を進めていく。

・伝統工芸品、食文化についても、製造者・販売者の理解を一層深めロゴマークの活用など日本遺産ブランドを活かした販売強化にも努めていく。

すんきなど独自の郷土食について、国の文化財（食文化）としても登録を進め、認知度の向上と後継者の裾野拡大を通して継承を図る。

・構成文化財の保存団体、製造者等については後継者不足も大きな問題であり、後継者育成に向けた対策も行っていく。

○指定文化財等の保存整備

○日本遺産ブランドの強化

○伝統的工芸品、食文化のプロモーション支援

○文化財の利活用に向けた取り組み

○製造者・販売者の認知度強化

○後継者育成

(7) 地域活性化のために行う事業			
(7) - 1 組織整備			
(事業番号 1 - A)			
事業名	協議会の見直しと観光連盟業務精査による推進体制強化		
概要	行政主導で財政基盤の弱い現協議会の体制を見直しと共に、観光連盟業務も見直して日本遺産木曾路推進室(仮称)として事務局機能を強化し、執行の責任を負う地域コーディネーターチームの指揮監督体制により民間の力を取り入れた施策を展開していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	事務局機能の強化	観光連盟業務を見直し日本遺産事業を担当する事務局「日本遺産木曾路推進室(仮称)」として新たなDMOガイドラインの基準を満たす民間運営体制を想定し、民間や、構成市町村等の職員派遣を行う。	協議会
②	地域コーディネーターチームの設置	組織運営や事業の企画進捗のマネジメント責任者として地域コーディネーターチーム(仮称)を設置する。	協議会
③	安定財源の確保(宿泊税交付金の活用)	長野県が令和8年度から宿泊者から徴収する宿泊税(一人当たり300円、当初200円)の一定額が市町村に配当される交付金を活用して、確実な組織体制を構築していく。(当初25,000千円程度の財源を想定)	構成市町村(中津川市を除く)・長野県
④	構成文化財保存団体等との情報共有	構成文化財の代表者等と各構成団体の実務担当者等による情報共有と意見交換をリアルタイムに行える体制をDX視点も踏まえて検討する。	協議会・構成文化財関係者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			
2023			
2024			
2025	事務局機能の強化		1件
2026	地域コーディネーターチームの選任、設置		5回/年
2027	地域コーディネーターチーム会議		5回/年
2028	地域コーディネーターチーム会議		5回/年
2029	地域コーディネーターチーム会議		5回/年
2030	地域コーディネーターチーム会議		5回/年
事業費	2025年度:0円 2026年度:500千円 2027年度:500千円		
継続に向けた事業設計	スタート時には、行政が運営基盤(財務、事務局)の一部を支えつつ、DMOや民間事業者が主体となる運営体制に移管していく。DMOや民間事業者との役割分担、連携を強化するなかで販売力の強化を図る。		
事業費	2028年度:500千円 2029年度:500千円 2030年度:500千円		

継続に向けた事業設計	民間事業者のプロモーションや販売促進に必要な支援体制を構築していく。		
(7) - 2 戦略立案			
(事業番号2-A)			
事業名	データ分析を踏まえたターゲットの設定		
概要	来訪者に木曽地域での観光消費行動を促す仕組みを構築するため、データの取得、分析によりターゲットを設定し、戦略的なマーケティングを行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	マーケティングデータの収集分析	観光消費実態調査等を行い、地域内の消費につながる具体策を検討する。	協議会
②	マーケティング戦略の策定と実行	データ分析をもとに、ターゲット設定とマーケティング戦略を策定し地域コーディネーターのもとに実行していく。	協議会
③	ブランドロゴデザインの作成、ルールづくり	「木曽路ロングトレイル」の看板や印刷物等で使用する日本遺産木曽路のブランドロゴデザインを公募の上選定。商用使用にあたっての使用料や活用方法を設定。決定したロゴデザインは認知を図るため広くメディア等を通じて発信を行う。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			—
2023			—
2024			—
2025	木曽地域の宿泊実態調査、人流（移動）調査		2件
2026	木曽地域の観光消費実態調査		1件
2027	ブランドロゴデザインの検討		1件
2028	ロゴの周知		1件
2029			
2030			
事業費	2025年度：2,000千円 2026年度：2,750千円 2027年度：500千円		
継続に向けた事業設計	人流（移動）調査は、令和8年以降、長野県の宿泊税交付金の算定にあたり、市町村に提供されるデータを活用予定		
事業費	2028年度：1,000千円 2029年度：0円 2030年度：0円		
継続に向けた事業設計	ロゴを工芸品や土産物などに利用して収益につなげていく。		

## (事業番号2-B)

事業名	他の行政計画への位置づけ		
概要	各組織の中長期計画や観光振興計画、観光戦略、文化財保存活用計画において、日本遺産活用のための取組を明記する		
	取組名	取組内容	実施主体
①	他の行政計画への位置づけ	構成団体が策定する計画に日本遺産活用のための取組を記載する。構成市町村、長野県、木曾広域連合の行政計画見直しのタイミングに向けて確認作業を進める。	構成市町村・長野県・協議会
②	アクションプラン、ロードマップの策定	「木曾広域観光振興計画」ならびに「日本遺産を活用した広域周遊実証事業」プロジェクトチームによるアクションプラン、ロードマップに位置づける。	木曾広域連合
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			—
2023			—
2024			—
2025	アクションプラン、ロードマップの策定		1件
2026	他の行政計画への位置づけ		2件
2027	他の行政計画への位置づけ(広域計画、県5か年)		2件
2028			
2029			
2030			
事業費	2025年度：0円      2026年度：0円      2027年度：0円		
継続に向けた事業設計	構成市町村の観光事業を進める上で各種計画や説明会で日本遺産の果たす役割について周知を図っていく		
事業費	2028年度：0円      2029年度：0円      2030年度：0円		
継続に向けた事業設計			

## (7) - 3 人材育成

## (事業番号3-A)

事業名	日本遺産を活用した広域・専門ガイドの育成		
概要	ガイド育成により魅力を地域内外へ発信するとともに、民間事業者の積極的な関わりを活かすことで地域全体を俯瞰できるコーディネーターの育成を図っていく。		
	取組名	取組内容	実施主体

①	ガイド育成講座	外国人旅行者への対応を含め、広域的・専門的なガイドができる人材を増やすための研修会、ネットワーキングによる情報交換会、技能習得講習会などを開催する。	協議会・木曾インバウンドガイド協会・民間事業者
②	ガイドから見た課題への取り組み	二次交通など、ガイドが活動するにあたって支障となる事項を洗い出し、制度設計を検討する。	協議会・構成市町村
③	地域コーディネーターの養成	民間事業者や市町村観光協会などと連携し、地域全体のプロデュースができる人材の確保（地域活性化企業人制度の活用も検討）に向け、必要な技能等の研究を行う。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			
2023			
2024	ガイド育成講座		
2025	ガイド育成講座		8名
2026	ガイド育成講座		8名
2027	地域コーディネーター・拠点マネージャー養成講座		5名
2028	地域コーディネーター・拠点マネージャー養成講座		5名
2029	"		
2030	"		
事業費	2025年度：1,100千円 2026年度：6,000千円 2027年度：5,200千円		
継続に向けた事業設計	事業者を中心に技能の向上を図り、あわせて人材の確保につなげていく。		
事業費	2028年度：1,200千円 2029年度：200千円 2030年度：200千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 4 整備			
(事業番号4-A)			
事業名	「木曾路ロングトレイル」の拡大、整備		
概要	中山道を中心に木曾路を南北に縦貫する「SAMURAI ROAD」(約80~100km)を優先的に整備し、更には阿寺溪谷・赤沢美林・御岳山麓・開田高原・木曾駒高原・藪原高原など周辺観光地への拡大を進めていく。		
	取組名	取組内容	実施主体

①	幹線ルートの整備	中山道（幹線）を軸として、観光庁等の各種補助事業を活用しながら、長距離を安心して歩ける環境を整備する。（案内所、トイレ、道標、パンフレット等）	木曾広域連合・構成市町村
②	幹線エリアから周辺エリアへの誘導のための整備	幹線となる南北を縦貫する中山道コースから東西方向の山麓エリアをサブストーリーとした掘り起こしなど、御嶽山国定公園化の取組と連携して整備し、地域内周遊（滞在）環境を整える。民間事業の既存商品との連携をはかる。	協議会、民間事業者、ガイド
③	案内解説板の整備	構成文化財を中心に、特に外国人旅行者に魅力（ストーリー）が伝わるような案内板の整備を行う。 （観光庁「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」等の活用を検討）	協議会
④	歴史的建造物を活用した宿泊、レストランなど体験施設の整備	古民家などの歴史的建造物を活用し、宿泊などの体験型施設の整備を行う。 （観光庁「歴史的資源を活用したまちづくり推進事業」、総務省「ローカル10,000プロジェクト」等の活用を検討）	構成市町村・民間事業者・金融機関
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	モデルルートの検証・検討会議		0回/年
2023			1回/年
2024			4回/年
2025	地域内ウォーキング関連の整備箇所数（道標）		20か所
2026	英語案内文の整備		43件
2027	英語案内板の整備		43件
2028	サブストーリーを活用した事業数		8件
2029	サブストーリーを活用した事業数		10件
2030	サブストーリーを活用した事業数		15件
事業費	2025年度：3,100千円 2026年度：10,000千円 2027年度：10,000千円		
継続に向けた事業設計	中山道を中心に整備をしながら木曾路全体を安心して歩ける「SAMURAI ROAD」を普及していく。最終的に100km程度のロングトレイルができる環境をめざす。あわせて周辺ルートとも連携させ、各レベルや目的に応じた多様なウォーキングコースを整備する。		
事業費	2028年度：5,500千円 2029年度：0円 2030年度：0円		

継続に向けた事業設計	幹線ルートの整備に続き、支線や入込先のエリアの整備を進めて面的な活用につなげていく。		
(7) - 5 観光事業化			
(事業番号5-A)			
事業名	ハイカーのための交通アクセス整備		
概要	香川県の面積にも匹敵する広大な木曾のエリア内を移動する手段として鉄道と併せてバスによる公共交通を活用していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	広域幹線バス「きそバス」の運行	旧中山道や域内の古道を歩くハイカーが各ルート上でバスを活用して日本遺産を巡ることができるよう令和7年10月から町村を跨ぐ路線を運行する。	木曾地域公共交通活性化協議会
②	長野・岐阜県境のバス乗り入れ事業	妻籠・馬籠のインバウンドを分散させて周遊ルートとなるよう既存の路線を活用して新たな路線を確保する。	北恵那交通・南木曾町
③	観光客の利便性向上に向けた取組	広域幹線バスでは、英語による車内放送や停留所看板等に英語表記を採用。また、キャッシュレス決済の導入、乗継割引などを行い観光客の利便性を高める。	木曾地域公共交通活性化協議会・民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	広域幹線バスの利用者数		159,000人
2023	"		159,000人
2024	"		159,000人
2025	"		160,000人
2026	"		163,750人
2027	"		167,500人
2028	"		171,250人
2029	"		175,000人
2030	"		178,750人
事業費	2025年度：1億1千万円(半期分) 2026年度：2億2千万円 2027年度：2億2千万円 ※広域幹線バスの年間委託料		
継続に向けた事業設計	利便増進事業の路線再編により、木曾地域内のバスのネットワークを構築。また、地域間幹線系統補助等を活用した運行財源の確保、利便増進事業の進捗を図ることなどで観光客にとっても利便性が高まるよう事業を展開していく。		

## (事業番号5-B)

事業名	モニターツアーの開催による検証と商品造成		
概要	木の文化を体験できるコンテンツを積極的に掘り起こし、事業化の可能性を探るため、モニターツアーを開催する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	伝統工芸を活かした木エクラフト体験ツアー	体験等を通じて伝統工芸を次世代に継承していくための人材育成を行い職人から指導を受けるツアーを検討する。協議会は情報連携し、ツアー造成者との調整を行う。	伝統工芸産地組合・協議会・木曾おんたけ観光局
②	多様なモデルルートの造成	年齢層別・目的別・レベル別等にコースを明確化し、誰もが安心して歩けるモデルルートをつくる	協議会・木曾広域連合・木曾観光連盟
③	構成文化財を起点とした体験プログラム・ガイドツアーの創出	御嶽山や阿寺溪谷など、ストーリーに基づく体験プログラムを創出し、つなげていくことで地域内周遊の基盤を作る。	阿寺ブルー(株)・木曾おんたけ観光局・木曾インバウンドガイド協会等
④	木曾街道・沿道おもてなしビジネスの事業化支援検討	荷物搬送、レンタル(檜笠、金剛杖、熊鈴、熊スプレー、傘)、など、インバウンド事業者と連携したサービスのビジネス化と事業拡大支援を検討 (総務省「ローカル10,000プロジェクト」等の活用を検討)	観光協会等・商工会・民間事業者・構成市町村
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			
2023			
2024			
2025			
2026	ガイドネットワークとの連携体制構築 ガイドによる販売商品数		1件
2027	ツアー商品におけるガイド利用件数		10件 (5件×2人)
2028	ツアー商品におけるガイド利用件数		30件 (10件×3人)
2029	ツアー商品におけるガイド利用件数		45件 (15件×3人)

2030	ツアー商品におけるガイド利用件数	60件 (15件×4人)
事業費	2025年度：円 2026年度：5,500千円 2027年度：3,300千円	
継続に向けた事業設計	各種のモニターツアーを検証し、改善することでDMO、ガイド等による日本遺産ストーリーをめぐるツアーの商品化（販売）につなげていく	
事業費	2028年度：1,500千円 2029年度：0円 2030年度：0円	
継続に向けた事業設計	同上	

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	子供（小・中学生）や地域への啓発		
概要	各市町村でのイベントの活用や日本遺産の日にあわせたPR事業などにより周知を図る。学校や行政における集まりの場なども活用していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産木曾路サミットの開催	構成市町村の持ち回りでサミット（シンポジウム）や日本遺産にふれるイベントを市町村単位で開催し、テーマを設定して住民への啓発を行う。	協議会
②	独自の日本遺産PR事業	構成文化財管理者と連携して日本遺産の日などに施設開放を実施し、ロゴの掲示や定期的なパンフレット配布などを行う。	協議会・構成市町村
③	小中学校での日本遺産学習の推進	小中学校において、日本遺産を「総合的な学習」や故郷探求などの素材として活用してもらう。	協議会・構成市町村
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	体験型イベント		0件
2023			1件
2024			1件
2025	地域内日本遺産イベントの開催数		2件
2026	地域内日本遺産イベントの開催数		3件
2027	地域内日本遺産イベントの開催数		4件
2028	地域内日本遺産イベントの開催数		5件
2029	地域内日本遺産イベントの開催数		6件
2030	地域内日本遺産イベントの開催数		7件
事業費	2025年度：2,000千円 2026年度：2,000千円 2027年度：2,000千円		

継続に向けた事業設計	協議会によるサミット（シンポジウム）開催や市町村の協力による日本遺産の日イベントや啓発活動を継続実施することで地元の機運を醸成していく。
事業費	2028年度：2,000千円 2029年度：2,000千円 2030年度：2,000千円
継続に向けた事業設計	同上

（7）－7 情報編集・発信

（事業番号7－A）

事業名	イベントなどの開催によるホームページと連携した発信		
概要	様々な切り口から情報発信を行い、認知度を高めていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産インフォメーションコーナーの設置	観光案内所、歴史資料館など観光拠点となる施設に日本遺産常設展示コーナーやガイドスコーナーを設ける。	観光案内所、歴史資料館等
②	ホームページ、SNSによる情報の強化	SNSによる発信、ホームページでの映像紹介など、旅マエ情報を提供できるよう協議会が主導して管内全体で連携した体制を構築する。	協議会・木曽観光連盟
③	日本フィルムコミッションの登録	無数のロケ候補地を活用するために日本フィルムコミッションに加入し、受入体制を構築する	協議会
④	関係他団体主催イベントでのPR	中部エリアや他地域の日本遺産認定地域との連携を進め、より広範なエリアへの周知を図る。	協議会、他日本遺産の協議会、木曽地域リニア活用推進協議会、中津川・塩尻・木曽・下伊那広域連携SDGs推進協議会等
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			—
2023	ウェブサイトのページビュー		—
2024			69,615PV
2025	ウェブサイトのページビュー		75,000PV
2026	ウェブサイトのページビュー （ホームページ改修（サーバー移転））		50,000PV
2027	ウェブサイトのページビュー （信州DCによる日本遺産木曽路PR）		60,000PV
2028	ウェブサイトのページビュー （データに基づく発信）		70,000PV

2029	ウェブサイトのページビュー (データに基づく発信)	80,000PV
2030	ウェブサイトのページビュー (データに基づく発信)	90,000PV
事業費	2025年度：1,000千円 2026年度：5,000千円 2027年度：1,000千円	
継続に向けた 事業設計	インターネットを中心にしながら様々な角度から情報発信に努め、認知度や来訪意欲を高めて観光客の増加につなげていく。	
事業費	2028年度：2,000千円 2029年度：2,000千円 2030年度：3,000千円	
継続に向けた 事業設計	同上	